放送大学 NEWS

毎日新聞「特集ワイド」2019.10.24

「若い頃、もっと勉強しておけばよかった」。これまでに多くの人から同じせりふを聞いてきた。52歳の私も、そう思ったことは一度や二度ではない。ひょんなことから考え直した。「今からやればいいのではないか」。そうだ、「学び」に定年はない。通信制の放送大学に入学して、遅ればせながら勉強し始めてみた。【奥村隆、写真も】

知られざる…放送大学の世界

海外で言葉が通じなかった時に、何度も「語学を身につけておけば役に立っただろうに」と感じた。そこで思い浮かべたのが、社会人向けの放送大学だった。文部科学省に設置認可された大学で、必要な単位を取得すれば「学士」の学位を得られる。

「無試験で入学できる」「放送授業を中心にマイペースで学べる」「通学制の大学より授業料が安い」と、好条件がそろっていることは知っていた。

ただ「20歳前後の頃より理解力や記憶力が低下しているのでは」「通学せずに独学に近い学び方ではモチベーションを維持できないのでは」「勉強時間を確保できないのでは」と理由をつけ、足踏みしていた。

そんな時、一本の映画を思い出した。キューバの老いた音楽家たちが、米グラミー賞を受賞して世界ツアーを実現させる姿を描いた「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」。既に70代以上になっていたミュージシャンたちが、数十年のブランクを経て表舞台に復帰し、聴衆の魂をふるわせるというストーリー。世界中の人々に再チャレンジの勇気を与えた映画だった。私も2000年にライブを見て、深く心を動かされた記憶がある。

あれほどの奇跡的成功を収めなくとも、とりあえず始めることが大事かもと考え、放送大学の入学手続きをしてみた。

放送大学に4年以上在学する「全科履修生」は、高校卒業資格さえあれば、誰でも入学できる。初年度納付金は、入学料2万4000円と、放送授業2単位の授業料1万1000円の計3万5000円から。履修登録した科目数に応じて授業料を支払う仕組みだ。

教養学部のみの単科大学だが「生活と福祉」「心理と教育」「社会と産業」「人間と文化」「情報」「自然と環境」の6コースがあり、総合大学のほぼすべての学問領域を網羅。学部生は全国で9万人に達し、マンモス私大を上回る日本最大規模だ。年代別では50代以上の中高年が半数近くを占める。大学によるアンケートでは、シニア世代の入学目的は「もう一度勉強し直すため」と答えた人が57%に達し、「教養を深めるため」「学ぶこと自体を楽しむため」と続く。

放送授業の内容がインターネット配信され、パソコンやスマホでいつでも視聴できるのも都合がいい。1985年の開学当初はテレビまたはラジオで学ぶのが基本だったため、放送時間に合わせて学習するか、録画・録音しておく必要があった。現在は45分間の放送授業を15回視聴し、通信指導のリポートを提出後、学習センターに出向いて単位認定試験を受ける。合格すれば単位が認定される。

「社会と産業」コースに入学した私は、ひとまず外国語科目「実践英語」だけを登録し、およそ四半世紀ぶりに晴れて大学生の身となった。ところが、だ。ネットでいつでも受講できるからとつい油断し、結局は一度も授業を受けないうちに受講期限が過ぎ、単位を取得できなかった。これでは駄目だ。大学に問い合わせたところ、最長10年の在学期間内に卒業必要単位を取る人は3割程度だという。私も計画を練り直す必要がある。

熱心に聴き入る学生たちを前に、公開講演会で「こころの健康」について説明する石丸昌彦教授＝東京・茗荷谷の放送大学東京文京学習センターで

学部生9万人／50代以上が半数近く／各地の学習センターで「面接授業」も

「面接授業を受けてみたらどうでしょう」。そう提案してくれたのは旧知のノンフィクションライター、高橋真樹さん(46)だ。非常勤講師として放送大学でパレスチナ難民問題を講義している。面接授業とは、全国57カ所にある学習センターやサテライトスペースに通学して受講する対面式授業。教室で先生から教わるスタイルなら、学習意欲の高い学生に囲まれて刺激を受け、やる気が出やすいというのだ。「授業で積極的に質問する人もいるし、学生同士のコミュニケーションも楽しそうですよ」。いいことを聞いた。

面接授業は年間約3000科目。所属コースにかかわらず、全国どこの授業でも科目登録できるうえ、全科履修生なら往復交通費には学割が適用される。定員があり、科目によっては抽選になる。

ウェブサイトの科目一覧ページを確認すると、興味をそそられた。「ディズニーランドの経済学」「健康長寿と食生活」といった実践的な科目や、「東京グリーン探訪」「水族館学入門」のように教室の外に出て学ぶ授業もある。いずれも授業8回で1単位。授業料は5500円。カルチャーセンターと比べれば格安だ。

初体験となる面接授業で私が登録したのは「韓国朝鮮語」。外国語の中では文法が理解しやすいと聞いていた。土日に4コマずつ2日連続で完結する。学生は約30人で男女半々くらい。やはり中高年が多い。講師がハングルの成り立ちや発声方法を説明し、全員で声を出して反復学習する。学生同士がペアになって「どこから来ましたか」などと質問し合う。40代に見える女子学生が「さっきの言い方との違いは何ですか」と質問すると、先生が丁寧に説明していた。

私の隣席は60代の男性。休憩時間に「なぜ韓国語を学ぼうと思ったのですか」と聞いてみたら、答えはこうだった。「私が参加した自治体の国際交流企画で韓国の姉妹都市から若者たちが来日した際、一生懸命に日本語で話しかけてくれる様子を見て、こちらも少しは話せるようにならなきゃと思ったんです」

正直、90分授業は長く感じたが、簡単な自己紹介程度はできるようになった。2日目の最後にリポートを提出して終了。きれいには発音できないが、声に出して読めるようになっただけでも、大きな進歩だ。これで韓国で道路標示を読めると思うと、ウキウキした気分になる。

「放送大学で学んだ一番大きなことは、学ぶことをためらわないということ」と振り返るのは、「この世界の片隅に」で知られる人気漫画家、こうの史代さん(51)だ。01年の卒業生で、放送大学イメージキャラクター「まなびー」の生みの親でもある。「知らないジャンルひとつひとつを研究している方がいて、教えようとしてくださっているということが印象に残り、とても勇気づけられました」

精神医学を教える石丸昌彦教授(62)が言う。「学生が真面目に授業を聞いてくれるので、教えていてやりがいを感じます」。20歳前後が大半を占める一般の大学との最大の違いは、学生の向学心の高さだという。「放送大学では私語のコントロールに悩まされることがありません。身銭を切って、自分の時間を割いて来ている人ばかりだからです」。出欠のためでなく、学びたいことを学びに来る姿勢に圧倒されるというのだ。

併設の大学院には修士課程・博士課程もあり、その気になれば、無限に学び続けられそうな感じがする。面接授業に出席していた50代女性は、学習センターで趣味の読書サークルに入って同年代の友人ができたという。まだまだ、いろいろな楽しみ方がありそうだ。